

さいとう あやの
齋藤 綾乃

NHK 長崎放送局「イブニング長崎」気象情報を担当・気象予報士・防災士・健康気象アドバイザー・高等学校理科教諭・地球温暖化コーディネーター・認定心理士・応用心理カウンセラー。北海道札幌市生まれ。北海道大学水産学部卒業。NHK 札幌放送局、NHK 放送センター、放送大学でキャスター・リポーターを担当し、2015年に気象予報士資格を取得。2016年からNHK 沖縄放送局で、2019年からNHK 長崎放送局で気象情報を担当。



写真1：長崎港 女神大橋

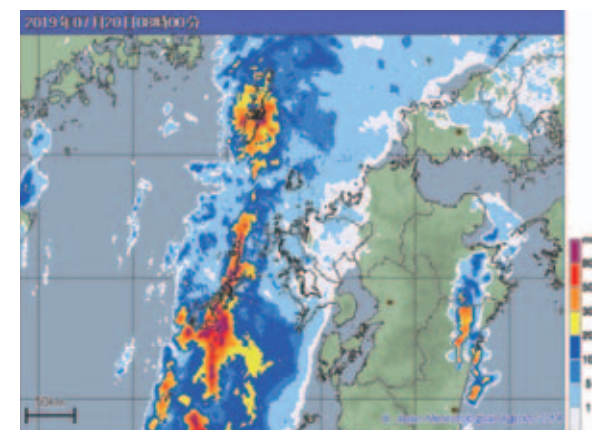


図1：2019年7月20日 線状降水帯 (気象庁HPより)

東シナ海に面した長崎県(写真1…長崎港 女神大橋)は、海の豊かな資源に恵まれる一方で、シビアな季節現象にさらされる地域でもあります。その一つが梅雨末期の大雨です。梅雨時には、暖かく湿った空気を大量に含む湿舌と呼ばれる西寄りの季節風と高気圧の縁を回る南西風が収束して線状降水帯が発生しやすく、梅雨末期には、毎年のように大雨の被害が発生しています(図1…二〇一九年七月二十日線状降水帯)。そうした中で、今年の梅雨は異例の結果となりました。長崎県を含む九州北部地方の今年の梅雨入りは五月十一日と平年より二十四

日早く、一九五一年に統計を取り始めてから最も早い梅雨入りとなりました。七月十三日の梅雨明けまでの期間に降った雨の量は、236.5mmと平年の四割にも満たない量となりました。記録的に早い梅雨入りで記録的に少ない総雨量となった今年の梅雨は、終わりを迎えました。しかし、東シナ海からの暖かく湿った空気の流れ込みは梅雨末期だけでなく、八月にかけても発生することがあります。今年がまさしくその例となりました。八月十一日から梅雨末期のような大雨が続ぎ、八月十四日には県北部の東彼杵町、川棚町、波佐見町に続き、長崎市、佐世保市、西海市



図2:あびきの原因(福岡管区気象台資料より)



写真2:2019年3月21日長崎市内 (長崎地方気象台撮影)

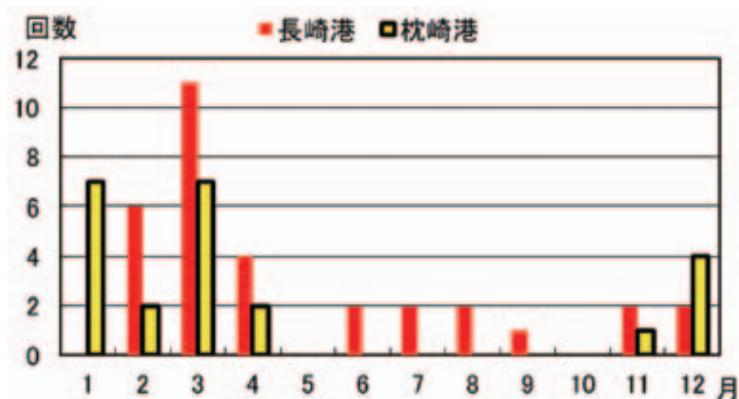


図3:長崎港と枕崎港における全振幅100センチ以上のあびきの発生回数 統計期間:平成9年(1997年)~令和元年(2019年) (長崎地方気象台HPより)

に相次いで大雨特別警報が発表されました。県内では、二〇一八年から毎年、大雨特別警報が発表され、今年の発表で四年連続五回目となりました。

び発生しています。一九九七年から二〇一九年までの気象台の観測では、長崎港では、十一月から百センチを超える副振動が増え、春先の三月にもっとも多くなります。三月に全体の五割の発生回数を占めています(図3…あびきの発生回数)。春先は、東シナ海で低気圧が発生しやすいためと考えられます。この副振動が大潮の満潮の時間帯と重なることさらに潮位が上昇し、冠水や浸水の被害が発生します。写真は二〇一九年三月二十一日に発生したあびきを起因とする長崎市内の浸水の様子です(写真2…二〇一九年三月二十一日長崎市)。この時、長崎検潮所の観測では最高潮位2.38mに達し、一九六一年に観測を始めてから潮位が最も高くなりました。

東シナ海からもたらされる特徴的な現象としてもう一つ紹介したいのが、地元で「あびき」と呼ばれる現象です。冬から春先にかけて発生しやすく、九州西海岸にみられる高潮の現象です。「あびき」の語源は、速い流れのために魚の網が流される「網引き」に由来するといわれています。気象用語では「副振動」といいます。副振動とは、陸や堤防に囲まれた湾や港などの潮位が、数分から数十分ほどの短い周期で上下する現象です。東シナ海で発生した低気圧や前線による気圧の急変が原因とされています。東シナ海で気圧の変化によって起きた小さな振動が増幅して伝わり、湾内に侵入してさらに共鳴するなどして増幅するのです(図2…あびきの原因)。

長崎県は、湾口から湾奥までが長く、振動が増幅しやすく、一メートルを超える副振動がたびたび発生してきます。大雨の季節が過ぎて、長崎県ではこれからの季節、あびきの発生による、係留している船の被害や低い土地での浸水や冠水に注意が必要になってきます。